慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ダイカスト製造企業における課題分析と解決策の考察
Sub Title	
Author	清水, 聡(Shimizu, Satoshi) 河野, 宏和(Kono, Hirokazu)
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2016
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2016年度経営学 第3166号
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002016-3166

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学大学院経営管理研究科修士課程

学位論文（　　2016　年度）

論文題名

ダイカスト製造企業における課題分析と解決策の考察

主　査	河野 宏和　　教授
副　査	坂爪 裕　　教授
副　査	市来嵜 治　　専任講師
副　査	

氏　名	清水　聡

論 文 要 旨

所属ゼミ	河野 研究会	氏名	清水　聡
（論文題名） ダイカスト製造企業における課題分析と解決策の考察			

（内容の要旨）

本研究は、筆者が事業承継を予定している有限会社清水ダイカストを研究対象としている。同社の実態及び抱えている課題を自分の手と足で調査、整理することが本研究の大きな目的である。

同社は年商約 1.6 億円、従業員 20 名、筆者の実父が社長を務める小規模企業である。
同社の業績は近年低迷を続けている。長年同社を支えてきた熟練技能者が定年退職してしまったことと、ここ数年で採用した社員の定着が悪いことで、製造技術が受け継がれず、業務が非効率化してしまった結果、不良率が上がり利益が圧迫されているというのが大きな問題の構造である。

業績回復のためには現場の改善が必要不可欠だということは現社長の認識でもあるが、品質不良は作業員の技能習熟度の低さという要因の他に、顧客の要求レベルの上昇、金型の老朽化も要因として挙げられるため、自社内で完全に解決するのはほぼ不可能であるということもまた、社長の認識の一つである。

しかし、筆者は、問題に対する社長の認識が、本質からずれているという違和感を抱いた。その理由は現場にあった。

社長が最も大きな課題であると認識しているはずの不良率も、現場では不良発生の要因分析はおろか、数値化すらされていない。さらに現場を見渡すと、暗い、汚い、くさい、といった目に見えて作業環境が劣悪ということ以上に、作業員の表情には覇気が無く、暗く沈んだ雰囲気が現場全体を覆っている。

筆者の幼少期、同社はベテラン社員を中心に社員同士皆仲が良く、皆が活き活きしていて子供ながらに現場は楽しい場所だ、という記憶が鮮明に残っている。しかし、そんな記憶の中の現場とは程遠い光景が広がっていたのであった。何故、現場はこんなにも変わってしまったのだろうか。

調査を続ける中で、同社の現場には高い不良率をはじめとする多くの問題が山積しており、それらが解決されないまま放置され、さらにまた新たな問題を誘発する、という悪循環を生んでいることがわかった。そのような状況下で作業員たちは会社に対する不満や諦め、漠然とした将来への不安を感じながら日々の作業を淡々とこなしている実態が明らかになった。それが同社の現場を変えてしまったのである。

このような状況を前にし、同社は業績の低迷以上に、危機的状況に置かれていると感じた。社長の認識と、実際筆者が現場で感じた危機感のズレをこのままにしてはならない。現場に立ち、問題を直視し、具体的な改善活動を実行していかなければ同社の将来は無い。このような意識のもと、現場に赴き、直接作業員と会話し、同社が抱える課題を解決することで、現場から経営を立て直す第一歩を踏み出すことを目的として作業を続けた。本研究では、不良低減を中心とした問題解決と改善のアプローチについて、事例に基づいた考察と提言を示している。